

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Sor Juana Inés de la Cruzとその詩-1

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 1988-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 榮一, Kimura, Eiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2233

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



Sor Juana Inés de la Cruz

とその詩 — 1

木村 榮 一

植民地時代、とりわけ十七世紀のイスパノアメリカの文学は、現代文学の陰に隠れてともすれば軽視されがちだが、そこにも独自のきらめきを見せる注目すべき文学者たちがいたことを忘れてはならない。Nueva España には、ドイツのイスパニスト Karl Vossler が、その存在自体が〈milagrosa⁽¹⁾〉（奇跡的）であると最大級の讃辞を送った sor Juana Inés de la Cruz をはじめ、詩人にして散文家、数学者で天文学にも通じていた Carlos Sigüenza y Góngora、スペインの黄金世紀を代表する Lope de Vega や Calderón de la Barca と並ぶ戯曲家 Juan Ruiz de Alarcón、あるいはスペインの詩人 Luis de Góngora と同世代で、その Góngora を崇拝しながら詩作を行なった Bernardo de Balbuena などがあり、Nueva Granada には、スペイン語とケチュア語で戯曲を書き、Luis de Góngora を論じた詩論“Apologética en favor de don Luis de Góngora”の作者としても知られる Juan de Espinosa Medrano、新大陸のバロック詩人として著名な Hernando Domínguez de Camargo、あるいはその辛辣きわまりない諷刺詩によって新大陸の Quevedo と評される Juan del Valle y Caviedes といった詩人、戯曲家がいた。

周知のように宗主国スペインは十六世紀に反宗教改革を行ない、その結果近代に背を向けて中世的な世界に閉じこもることになった。当然のことなが

(1) Octavio Paz; Sor Juana Inés de la Cruz o Las trampas de la fe, p. 248; Edit. Seix Barral, España, 1982.

ら、その影響は新大陸にも及び、種々の制約が課されることになったが、なかでも書物の輸入が制限されたことは知識人にとって大きな痛手であった。宗教、思想上好ましくない書物はもちろん、小説の輸入までが禁止されていたが、それでも天文学や科学、哲学に関する本をはじめ、エロティックな小説やプロテスタント的な註釈のついた聖書などがひそかに持ち込まれていた。O. Paz によると、Nueva España の Sigüenza y Góngora はガリレオをはじめケプラー、コペルニクス、デカルトなどを引用しているとのことである⁽²⁾。しかし、当時は上記のような書物がおおびらに読めたわけではなかったし、入手もきわめて困難であったことは言うまでもない。そうした中で、十七世紀の新大陸の文学者たちが手本と仰いだのは、ラテン文学であり、中世の神学と文学、ルネサンス期の文学、とりわけ同時代のスペインで花開いた黄金世紀の文学であった。Lope de Vega や Luis de Góngora, Baltazar Gracián, Francisco de Quevedo, Calderón de la Barca といった作家たちがひしめくこの時代の文学は、スペイン本国をはじめスペイン語圏の国々では、おおむねバロック文学としてひとまとめにして論じられることが多い。

一方、E. クルテウスをはじめ、G. ホッケ、A. ハウザー、W. サイファー⁽³⁾などの研究者たちは、ルネサンス以後の芸術をマニエリスムとバロックに分け、それぞれに精緻な理論を展開させている。しかし、絵画や造型芸術を取り上げる時はまことに明快に論じているのに、文学について語りはじめたとたん歯切れが悪くなったり、マニエリスムとバロックの定義づけが判然とせず、論じれば論じるほど、この両者の区別が不分明になる傾向が見られ、いまだに定説と呼ぶものがないというのが現状だろう。

(2) O. Paz, op. cit. p. 337.

(3) E. クルテウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路他訳、1971年、みすず書房。

A. ハウザー『マニエリスム』若桑みどり訳、1970年、岩崎美術社。

G. ホッケ『文学におけるマニエリスム』種村季弘訳、1971年、現代思潮社。

W. サイファー『ルネサンス様式の四段階』河村錠一郎訳、1976年、河出書房新社。

しかし、元来ルネサンスからマニエリスム、マニエリスムからバロックへの移行というのは徐々に行われたものであり、そこに明確な一線を引くことはむずかしい。たとえば、スペインのルネサンス期の詩人 **Garcilaso de la Vega** を見ても、彼のうちにはマニエリスム的な傾向がすでに現われており、それが **Juan de Herrera** になるとよりいっそう顕著になってくるのである。

こうしたことを考慮したうえでマニエリスムとバロックについて考えてゆかなければならないが、考えてみればこの両者はともにルネサンス様式の歪曲、変化、もしくはその否定として立ち現われてきたものである。しかし、十五世紀末に発見された新大陸にはそもそもルネサンスが存在しなかった。この新大陸に旧大陸の文学が移植されたわけだが、その木が新しい土地になじんで独自の花を咲かせるのは、十六世紀末から十七世紀にかけてのことで、まずマニエリスム的な詩が生まれて次にバロック時代を迎えることになる。ひとまずここで **Octavio Paz** のマニエリスとバロックについて語った言葉を引くことにするが、**Paz** はいろいろな研究者の説を紹介し、さらに **Frank Warnke** の “**Versions of Baroque**” を取りあげたあと、このべている。

“**Nada de esto es nuevo. Las diferencias entre una y otra manera eran ya conocidas y pueden resumirse así: la primera modalidad es conceptista, paradógica, filosofante y marcadamente intelectual; la segunda es metafórica, pictórica y acentuadamente estética. En la primera triunfa el concepto; en la segunda, la imagen. Una se dirige al intelecto, otra a la vista y a los sentidos.**”⁽⁴⁾ (これ [F. Warnke のべていること] はなにも目新しいことではない。この両者 [すなわちマニエリスムとバロック] の違いはすでに知られていることで、次のように要約できるだろう。すなわち、最初のスタイル [マニエリスム] は思考の遊びを好み、逆説的、哲学的で、しかもきわだって知的であるが、二番目のスタイル

(4) **O. Paz, op. cit. p. 75.**

ル〔バロック〕は暗喩にみち、絵画的で、きわめて審美的である。前者においては思考が勝利を収め、後者の場合はイメージが勝利する。前者が知性にむけられているのに対して、後者は視覚と五感にむけられている。）

A.ハウザーをはじめ多くの研究者がマニエリスム論、あるいはバロック論の中で延々とページを費してのべていることを、Pazはわずか数行で片付けており、その手並みはまことにあざやかというほかはない。研究者たちの精緻で錯相した理論の森の中で踏み迷っていたわれわれは、この一文で見晴らしのよい地点にようやく辿り着いたような思いとらえられる。Pazはマニエリスムとバロックをあまり明確に区別すべきではないとしきりに言っているが、そのことを忘れてはならないだろう。彼はさらにつづけて、新大陸におけるマニエリスムとバロックについて次のようにのべている。

En Nueva España el manierismo estaría representado en su fase incipiente, como ya dije, por Terrazas y, en su forma más radical y acabada, por Bernardo de Balbuena. ¿O habrá que llamar barroco a Balbuena por su abundancia verbal, su colorido fuerte y su amor a las metáforas brillantes? Sea como sea, es claro que entre las obras de estos dos poetas y las de Luis de Sandoval y Zapata (mediados del XVII) y sor Juana Inés de la Cruz hay una diferencia esencial. Las segundas no sólo son más complejas sino que se presentan como formas cerradas y en las que reina la ley del contraste, mientras que en las primeras hay “una multiplicidad de elementos flotantes”, característica central del manierismo según Harold B. Segel. Dicho esto, repito: no deben exagerarse las diferencias entre manierismo y barroquismo: no sólo son estilos fronterizos sino que a veces se confunden. Entre uno y otro la línea divisoria es indecisa y hay una zona en la que, como en el poema famoso, “no es agua ni arena / la orilla del mar”. Es revelador que varios de los poetas que,

según la crítica moderna, son representativos del manierismo italiano —Tasso, Guarini—figuren precisamente entre los que cita con aprobación el ultrabarroco Gracián en su *Agudeza y arte de ingenio*.⁽⁵⁾

(すでにのべたように、ヌエバ・エスパーニャにおけるマニエリスムの初期の段階は Terrazas によって、またそのもっとも根源的で完成された形式は Bernaldo de Balbuena によって代表されるだろう。それとも、Balbuena はその豊かな言語、強烈な色彩、煌くようなメタファーへの偏愛ゆえにバロックと呼ぶべきだろうか？とまれ、このふたりの詩人の作品と Luis de Sandoval y Zapata (十七世紀中葉) と sor Juana Inés de la Cruz の作品との間に本質的な相違があることは明らかである。あとのふたりの作品のほうがより複雑であるばかりでなく、閉じられた形式を備えており、しかも対照の法則がそこを支配しているのである。それにひきかえ、先のふたりの作品には、Harold B. Segel がマニエリスムの中心的な特徴として挙げている《多様な浮動的要素》が見られる。ここでもう一度くり返しておくが、マニエリスムとバロックの差違をあまり誇張すべきではない。このふたつの様式はたがいに境界を接しており、時にはまざり合うこともある。両者を分かち境界線は曖昧で、そこには名高い詩の中で「砂かと思えば水、水かと思えば砂、それが浜辺」とうたわれているような領域が存在している。Tasso, Guarini といった、現代批評がイタリア・マニエリスムの代表的な文人とみなしている何人かの詩人を、ウルトラ・バロックの Gracián がバロック詩人とみなして、その著書『機知と創意の術』の中で引用しているのは、まことに啓示的である。)

マニエリスムにおいてようやく自分の声を見出した新大陸の詩は、バロック時代に入って美しい花を咲かせることになるが、その中で遅咲きながらもっとも大輪の花を咲かせたのが sor Juana Inés de la Cruz である。十七世紀の植民地文学を代表する詩人として、またスペイン黄金世紀のすぐれ

(5) O. Paz, op. cit. p. 76.

た詩人たちに比肩しうる作者として著名な彼女には、これまで数々の讃辞が浴びせられてきた。たとえば、Enrique Anderson Imbert はその文学史“Historia de la literatura hispanoamericana”の中で“La voz más viva, graciosa y entonada del periodo barroco hispanoamericano fue la de Sor Juana Inés de la Cruz.”⁽⁶⁾（イスパノアメリカのバロック時代の中で、もっとも生き生きとして美しく優雅な声は Sor Juana Inés de la Cruz の声である）とのべ、Pedro Henríquez Ureña は“Las corrientes literarias en la América Hispánica”の中で十七世紀の女流作家をふたり取り上げたあと“Pero ninguna de estas mujeres igualó la extraordinaria fama o el genio de la monja mexicana Sor Juana Inés de la Cruz, a quien se llamó la “décima musa”⁽⁷⁾（けれどもこのふたりの女性も、《十番目のミューズ》と呼ばれたメキシコの尼僧 Sor Juana Inés de la Cruz のとほりもない名声、あるいは才知には及ぶべくもなかった。）とのべている。また、ラテンアメリカ史の研究者として知られるチャールズ・ギブソンは『イスパノアメリカー植民地時代』の中で、「鋭い才気と能力の点では、当時のどの作家も、ヒエロニムス会の修道女で非凡な詩人でもあるアナ・デ・ラ・クルス〔一六五一～一六九五〕……と比較すれば、取るに足りない存在となってしまう⁽⁸⁾」と絶讃し、Giuseppe Bellini はその浩瀚な文学史の中で“En este siglo, Juana de Asbaje y Ramírez de Santillana (1651~1695), sor Juana, es la personalidad más destacada de Barroco”⁽⁹⁾（この世紀（十七世紀）においては、Juana de Asbaje y Ramírez de Santillana (1651~1695), すなわち sor Juana がバロック文学の中でもっとも傑出している）と記している。

(6) Fondo de Cultura Económica, México, 1965. p. 118.

(7) Fondo de Cultura Económica, México, 1969; p. 79.

(8) チャールズ・ギブソン『イスパノアメリカー植民地時代』（染田秀藤訳）、p.142;平凡社、1981年。

(9) G. Bellini; Historia de la literatura hispanoamericana, p. 141; Edit. Castalia, España, 1986.

K. Vossler をはじめ、ここに挙げた研究者たちはひとり残らず sor Juana Inés de la Cruz を十七世紀のもっともすぐれた詩人として絶賛しているが、Octavio Paz が一九八二年に発表した“Sor Juana Inés de Cruz o las trampas de la fe”⁽¹⁰⁾ もまた近年におけるもっともすぐれた sor Juana 論であるばかりでなく、あの詩人へのこの上ない頌歌となっている。

現在でこそこれほどまで高く評価されている sor Juana だが、一度忘れ去られた彼女がふたたび注目されるようになったのは今世紀に入ってからのものである。⁽¹¹⁾三巻本の著作集が一七二五年に出て以来、その作品はまったくと言っていいほど出版されなかった。一九二八年頃から彼女の著作が散発的な形で出版されはじめるが、Alfonso Méndez Plancarte が編集した四巻本の全集が日の目を見たのは一九五一年から一九五七年にかけてのものである。⁽¹²⁾詳細な注釈と巻頭論文のついたこの全集によってようやく二世紀ぶりに、sor Juana の全作品が読者の前に姿を現わすことになった。二世紀間忘れ去られていた詩人が今世紀に入ってふたたび評価されるようになったというのは、難解さで知られるスペインの詩人 Luis de Góngora の場合と非常によく似ている。周知のように、sor Juana は Góngora を師表と仰いで詩作を行っていたし、バロック文学の金字塔とも言うべきその長編詩“Primerosueño”には Góngora の代表作“Soledades”の影響が随所に見られる。

Alfonso Reyes によれば、Góngora がふたたび取り上げられるようになったのは今世紀の初頭からで、それも当初はフランスで注目された。それまでは“Góngora aparece como uno de los responsables personales del mal: peste divina de la que conviene alejarse con respeto.”⁽¹³⁾（ゴンゴラは悪の元凶のひとり、つまり畏敬をこめて遠ざけるべき神聖な疫病と

(10) O. Paz, op. cit.

(11) Alfonso Reyes; Obras completas, tomo VII, p. 235~245; Fondo de Cultura Económica, México, 1958.

(12) Sor Juana Inés de la Cruz, Obras completas, 4 tomos; Fondo de Cultura Económica, México, 1951~1957.

(13) A. Reyes, op. cit. p. 84.

して現われている)と A. Reyes がのべているように、その難解さゆえに誰ひとり近付こうとしなかった。Góngora を本格的に再評価したのは、スペインの二十七年代の詩人たち、とりわけ Damaso Alonso, Geraldo Diego, García Lorca であることはよく知られている。

この Góngora を師表と仰いで詩作を行なった sor Juana が師のあとを追うような形でふたたび評価されたというのは、バロック文学に対する関心の高まりを考えれば当然の結果と言えよう。しかし、Góngora を再発見し、そこから新たな詩的言語とイメージの創造を目ざしたのが、前衛主義運動、とりわけシュルレアリスムの影響を受けた二十七年代の詩人たちであるということと、浩瀚な sor Juana 論を書いた Octavio Paz もまた若くしてシュルレアリスムの洗礼を受け、新たな詩的言語の創造を目ざして創作を行っている詩人であるということを思い合わせてみると、そこにはなにか深いつながりがあるように思われる。この問題についてはのちに触れるとして、ここではひとまず sor Juana の伝記と彼女が生きた世界を、Paz の論文にもとづいて見てゆくことにしよう。

☆ ☆ ☆

Sor Juana Inés de la Cruz は本名を Juana Inés Ramírez de Asbaje といい、一六四八年十二月二日、Nueva España の San Miguel de Nepantla に生まれた。⁽¹⁴⁾ 父親の Pedro Manuel de Asbaje y Vargas Machuca については、ビスカヤ人というだけで詳しいことはなにとつ分かっていない。母親の Isabel Ramírez Santillana は Pedro Manuel de Asbaje との間に三児をもうけたあと、軍人の Diego Ruiz Lozano といっしょになってさらに三人の子供をもうけたが、この六人の子供たちはいずれも庶子として教会に届けられており、Juana Inés もその中に含まれている。

(14) Sor Juana の生年は従来一六五一年と考えられてきたが、A. G. Salceda の研究論文(一九六二年)によって、一六四八年だということが判明した。また、姓のほうは彼女自身が母方の姓を好んで用いていたので、Ramírez y de Asbaje とすべきである、と O. Paz はのべている。

母親の手で育てられた Juana Inés はもの心がつきはじめた頃から勉強に興味を示し、三歳の時には早くも字が読めるようになっていた。勉強好きで知的好奇心の旺盛な彼女は六、七歳の時に、メキシコ市には大学があって、男しか入学できないが、そこならいくらかでも勉強できると聞いて、さっそく母親をつかまえて、大きくなったら男装して大学に通うつもりなので、メキシコ市の親戚の家に預けてほしいと言って困らせた。ちょうどその頃に事情があって彼女は、Panoayán にいる祖父の Pedro Ramírez といっしょに暮らすことになったが、祖父というのが当時としては珍しい教養人で、蔵書も沢山あったので、その書齋に入りこんでむさぼるように本を読みあさった。当時をふり返って彼女はこうのべている。

“.....yo despiqué el deseo en leer muchos libros varios que tenía mi abuelo, sin que bastasen castigos ni reprensiones a estorbarlo; de manera que cuando vine a Méjico, se admiraban, tanto de mi ingenio, cuanto de la memoria y noticias que tenía en edad que parecía que apenas había tenido tiempo para aprender a hablar.”⁽¹⁵⁾

(……わたしは祖父が持っていた本を好きなだけ読んだのですが、読んではいけないといって罰を受けたり叱られたりしたことはありませんでした。ですから、メキシコにやってきた時、みなさんはわたしがようやくしゃべれるようになった年頃に見えるのに、才知があり、記憶力がよくていろいろなことを知っているのにびっくりされたのです。)

その祖父は一六五六年に亡くなっている。Juana Inés はそのあと母方の叔母で、メキシコ市に住んでいた doña María のもとに預けられたが、先の引用はその当時、つまり彼女が八、九歳の頃のエピソードである。Doña María の夫 Juan de Mata は大変裕福な人で、副王の宮廷にも影響力をもっているほどの人物だったが、Juana Inés は十六歳までその Mata 家の屋

(15) Sor Juana Inés de la Cruz; Obras completas IV, p. 446; Fondo de Cultura Económica, México, 1976.

敷で暮らすことになった。その間も独学で本を読みつづけたが、やがてその豊かな教養と類稀な美貌とで人の噂にのぼるようになった。

一六六四年、Mancera 侯爵 Antonio Sebastián de Toledo が新しい副王としてメキシコに赴任してくるが、その時に Juana Inés は叔母夫妻の紹介で副王夫人 Leonor Carreto に仕えることになった。美しくて思慮深く、しかも機知に富んでいるうえに驚くべき学識を備えていた彼女はたちまち副王夫妻の寵愛を勝ちとり、宮廷内でも注目の的になった。Sor Juana の伝記作家 Diego Calleja は当時のエピソードとして次のような話を伝えている。

El señor marqués de Mancera, que hoy vive y viva muchos años (...) me ha contado dos veces que estando con no vulgar admiración de ver en Juana Inés tanta variedad de noticias [...] quiso desengañarse y saber si esa sabiduría tan admirable era infusa o adquirida o artificio o no natural y juntó un día en su palacio cuantos hombres profesaban letras en la Universidad y ciudad de México. El número de todos llegaría a cuarenta y en las profesiones eran varios, como teólogos, escriturarios, filósofos, matemáticos, historiadores, poetas, humanistas (...) Concurrieron, pues, el día señalado a certamen de tan curiosa admiración; y atestigua el señor marqués, que no cabe en humano juicio creer lo que vio, pues dice *Que a la manera de un galeón real — traslado las palabras de Su Excelencia—se defenderta de pocas chalupas que le embistieran, así se desembarazaba Juana Inés de las preguntas, argumentos y réplicas que tantos, cada uno en su clase, la propusieron.*⁽¹⁶⁾

(マンセラ侯爵一侯は現在も御健在で、いつまでも長生きされるようにと願っている(……)—は二度にわたってわたしに次のような話をされた。すな

(16) O. Paz, op. cit. p. 141.

わち、Juana Inés が大変な博識家であることに少なからず驚かれた侯爵は、その驚嘆すべき知識がはたして天成ものか、獲得されたものか、あるいは単なる見せかけで本来身に備わったものではないのかどうか、確かなところを知りたいとお考えになり、ある日、メキシコ市の大学、および市内で学問を講じている人たちをひとり残らず宮殿に呼び集められた。その数は四十人にのぼり、職業も神学者、聖書学者、哲学者、数学者、歴史家、詩人、人文学者……とじつにさまざまであった。彼らは指定された日に、あの奇妙で驚くべき討論会に駆けつけてきた。侯爵閣下はそこで、その目で見ても容易には信じがたいようなことを目にされて、次のように語っておられるが、その言葉をそのままここに引き写しておこう—Juan Inés は、大勢の人間がそれぞれの立場から次々に浴びせかけてくる質問や議論、反論をあざやかに切り返したのだが、その態度たるや、さながら本物のガレオン船が数隻の二本マストの小型船を相手にするようにじつに堂々としたものであった。

メキシコ市の諍々たる学者、文人を相手に議論を戦わせ、一步もあとに引かずに相手をやりこめたのが十六、七歳の少女だったというのだから、驚くほかはない。

それにしても、いくら Mata 家の推薦があったとは言え、父親のいない庶子の Juana Inés が宮廷に入り、副王夫人に仕えて寵愛を勝ち得たばかりか、宮廷内の人気者になったというのは、いささか奇異な感じがしないでもない。しかし、O. Paz によると、当時は宗教的・政治的な正統性に関してはきわめて厳格であったが、男女間のモラルに関してはまことにおおらかで、庶子だからと言って特別な扱いをうけることはなかった。というのもあの時代は風紀がかなり乱れており、社会全体が庶子をなんの抵抗もなく受け入れていたからである。宗教的な厳格さと風紀の乱れはなにも新大陸にかぎったことではなく、むしろバロック時代に共通して見られる特徴だったようで、その点について O. Paz は次のようにのべている。

Una y otra vez se ha subrayado la extrema religiosidad de la época

y su sensualidad no menos extrema. El contraste violento entre severidad y disolución aparece en todas las manifestaciones de la Edad Barroca y es común a todos los países y a todas las clases. Muchas veces austeridad y relajación se dan en una misma alma: John Donne es autor de poemas libertinos como la elegía *Going to Bed* y de sermones devotos. En los poemas de Quevedo dialogan sin cesar el alma y el culo, los huesos y el excremento. El clamor, hecho de admiración y escándalo, que produjo el erotismo helado del *Adonis* de Marino puede compararse con las pasiones que despertaron hace sesenta años las novelas de Lawrence, Joyce y Proust. La gran invención literaria de la Edad Barroca: el concepto, la unión de los contrarios expresa con extraordinaria justeza el carácter de la época.⁽¹⁷⁾

(当時の極端なまでの宗教心とそれに劣らず極端な官能性はこれまで一度ならず強調されてきた。厳格さと風紀の乱れが激しいコントラストを見せているが、これはバロック時代のあらゆる面に見られるもので、すべての国、すべての階級に共通している。厳しさとおおらかさは同じひとりの人間のうちにも見られる。John Donne はエレジー “Going to Bed” のような放縦な詩を書く一方で、敬虔な説教を行っている。Quevedo の詩では、魂と尻、骨と排泄物がたえず対話を交している。Marino の “Adonis” に見られる凍ったエロチシズムは、賞讃と非難の声を同時にまきおこしたが、これは六十年前に Lawrence, Joyce, Proust の小説がひきおこした熱狂とよく似ている。対立するものの合一である el concepto はバロック時代の偉大な文学的発明だが、これはあの時代の性格を驚くほど正確に表わしている。)

(17) O. Paz, op. cit. p. 105.

(18) 人間の抱く考えやイメージを意味し、イタリア語のコンチェット(conceto)綺想とも関連する語だが、一方で concepción (受胎) との関係で胎児をも意味する。Paz はその二重の意味を生かしてこの語を用いている。

この一文はただちに中世末期の民衆の姿を語ったホイジンガの言葉を思い起こさせる。

「生活ははげしく多彩であった。生活は、血の匂いとばらの香りをともにおびていた。地獄の恐怖と子供っぽいわむれとのあいだ、残忍な無情さと涙もろい心のやさしさととのあいだを、まるで子供の頭をもった巨人のように、民衆はゆれうごいていた。この世のさまざまな楽しみの完全な放棄と、富、歓楽へのあくなき執着とのあいだ、陰險な憎しみと笑いを絶やさぬ気のよさとのあいだを、民衆はゆれうごいていた。極端から極端へとゆれうごいて生きていた。⁽¹⁹⁾」

シェイクスピアの『オセロー』、『マクベス』、あるいは『ハムレット』の中にさえ中世人の面影を読み取ることができるように、Donne や Quevedo の作品のうちにも当然のことながら中世人的性格を読みとることができる。このような振幅の大きい精神は、バロック時代に入って聖と俗、厳格さと寛大さを同時に合わせもつことを学んだのであり、そこからあの時代特有の厳しさとおおらかさが生まれてきたと見ることもできよう。

庶子であった sor Juana がこのような時代に生まれたのは、まことに幸運だったと言えるが、父親がいないという事実はやはり彼女のうえに重くのしかかってきた。副王夫妻の寵愛を受け、宮廷内でももてはやされた sor Juana だが、父親がおらず、十分な持参金を用意できなかったために結婚はあきらめざるを得なかった。将来のことを考えた彼女は、副王夫妻の了解を得て、修道尼になる決意を固めた。十八歳の時に一度 San José de las Carmelitas Descalzas 修道院に入るが、その戒律の厳しさに音をあげて三ヶ月で飛び出し、それから一年半後の一六六九年に、戒律がそれほど厳格でないことで知られる San Jerónimo 修道院に入って、得度した。彼女が宮廷の女官をやめて尼僧になったのは宮廷での恋に破れたのではないかと推測する伝記作家もいる。類稀な美貌に恵まれ、知性と教養を兼ね備えていた

(19) ヨーハン・ホイジンガ『中世の秋』堀米庸三訳、p.101. 中央公論社、昭和42年。

彼女をまわりがおそらくほうってはおかなかっただろうが、彼女自身は幼い頃から、文学と学問の世界にあこがれており、詩作や戯曲を書くことに大きな喜びを見い出していた。結婚への夢はあったにせよ、修道女となって創作と読書に打ちこめるということはこの上ない喜びだったにちがいない。戯曲“Los empeños de una casa”の主人公で、彼女自身の分身とみられる doña Leonor を通して、“Inclíneme a los estudios / desde mis primeros años / con tan ardientes desvelos”⁽²⁰⁾（幼い頃からわたしは / 燃えるような熱情をこめて / 勉学にいそしんできました）と語り、またソットのひとつで次のようにうたっている。

En PERSEGUIRME, Mundo, ¿qué interesas?

¿En qué te ofendo, cuando sólo intento
poner bellezas en mi entendimiento

y no mi entendimiento en las bellezas?

Yo no estimo tesoros ni riquezas;

y así, siempre me causa más contento

poner riquezas en mi pensamiento

que no mi pensamiento en riquezas.

Y no estimo hermosura, que, vencida,

es despojo civil de las edades,

ni riqueza me agrada fementida,

teniendo por mejor, en mis verdades,

consumir vanidades de la vida

que consumir la vida en vanidades.⁽²¹⁾

（世間よ、わたしを迫害してなにが面白いのだ？

わたしは美を理解するのではなく

(20) Sor Juana Inés de la Cruz, op. cit. p. 37.

(21) Sor Juana Inés de Cruz; Obras completas, I, p. 277~288; Fondo de Cultura Económica, México, 1976.

自分の理解を美しいものにしたいと考えているが、
そのどこがいけないというのだ？
わたしは富や財宝を重んじたりはしない
だから、富について思いを巡らせるよりも
自分の考えを豊かにすることのほうが
いつもより大きな喜びをもたらしてくれる
わたしは齢老いて衰えてしまえば
無惨な残滓となり果てる美貌を重んじたりはしない
はかない富もわたしを喜ばせはしない
真実を言えば、虚栄のうちに人生を送るのではなく
人生の虚しさを使い果たすことの方がよいと考えている)

entendimiento と **bellezas, pensamiento** と **riquezas, vida** と **vandades** を巧みに組み合わせた知的な性格のこのソネットは、典型的な **conceptismo** の詩と言えよう。作品としての完成度は高く、読む人を思考の遊戯、知の遊戯に誘い込むが、同時にその内容の高邁さがこの作品をより美しいものに仕上げている、訳文の拙なさはいかんともしがたい。とまれ、**sor Juana** の作品は、原稿はもちろんのこと、手書きの写しさえ残っていない。加えて、早くから詩人として完成されていたので、その作品のスタイル、修辭、内容等から制作年代を推し量ることもむずかしい。しかし、いずれにせよ、この作品が書かれたのは、その内容からして彼女が **San Jerónimo** 修道院に入ってからのことにはちがいない。副王夫妻の寵愛を受け、有名貴顕の士がひきもきらずに僧室を訪れ、しかも彼女の詩や戯曲が世間の注目の的になっていたのだから、修道院という狭い世界はもちろんのこと、外の世界の人たちからも嫉妬と羨望の入りまじった目で見られていたにはちがいない。また、彼女は修道女だというのに、宗教上の勤めをおろそかにし、神や聖書の言葉について思いを巡らせるのではなく、神学やそのほかの学問に打ち込み、文学にのめりこんでいるとあって陰口を叩かれていた。けれども、そうした

中にあってもなお、彼女は自分自身に忠実であろうとしていることは、上記の引用からも明らかだろうし、失恋による痛手で尼僧になったという説はやはりとりがたいと言えよう。

ここで、彼女が San Jerónimo 修道院に入った頃のメキシコ市に目を向けてみよう。当時、市の人口は約十万人で、そのうちの約二万人がスペイン人と criollos (新大陸生まれのスペイン人) で占められており、残りはインディオ、インディオと白人の混血 mestizos, それに白人と黒人の混血 mulatos によって構成されていた。人口約十万の町に、修道院が二十九、尼僧院が二十二あったというから、これは驚くべき数である。しかし、僧院のすべてが純粋な霊的生活を送るための場であったわけではなく、なかには慈善事業や教育、文化活動にもつばら力を注いでいるところや職業を身につけさせる目的の、職業訓練所のような僧院もあって、内実はかなり多様だったようである。また、大半の僧院は大変裕福で、植民地経済の中で大きな比重を占めていた。僧院はそれぞれに土地や建物を所有しており、そこから利益をあげていただけでなく、僧院内の作業所や依頼して作らせた品物を売り捌き、さらに広大な農地で収穫される農産物を市場に流していた。また、農産物の市場に介入したり、有利な投機にも手を出していた。Sor Juana の入った San Jerónimo 修道院を例にとると、僧院の事業に投資した人に対しては、年五パーセントの利子をもたらされたと言われる。つまり、当時の僧院というのはある意味で現代における株式会社のような性格を兼ね備えていたのである。その裕福さを反映して、修道院の建物は宏壮なばかりでなく、大変立派なものであった。中にある僧室は一家族がゆったり暮らせるくらいのがあり、部屋数も多く、個々の僧室は売買されたり、時には賃貸されることもあった。San Jerónimo 尼僧院の場合、僧室は大半が上下二階使えるようになっていて、中には居間、客間、寝室、台所はもちろん、トイレもついていた。僧院内の生活はいろいろな日課や規則、作業などで縛られていたが、自由な時間もかなり取れたようである。食事も僧室に台所がついていること

からも分かるように、各自が自分の部屋でとることができた。

San Jerónimo 尼僧院は大司教の監督下におかれていたが、たいていのことは僧院の自由裁量にまかされていたので、言ってみれば小さな共和国のようなものだった。Juana Inés が僧室を買う時も、僧院の所有する農場に金貨で二千ペソ 投資したのだが、その手続さえ踏めば、自動的に大司教の認可がおりるようになっていた。尼僧院での生活は、朝六時に起床してまず“prima”の祈りをあげ、そのあとミサを済ませて八時にパンと玉子、牛乳、バターで朝食をとる。朝食後は作業室で共同作業をするきまりになっていた。作業を休んだり、別室で行う場合は、尼僧院長の許可を受けなければならなかったが、その規則はほとんど守られず、作業も作業室でいっしょに行うのではなく、気の合ったもの同士が数人のグループになったり、ひとり自室で行なうものもいた。正午に“sexta”の祈りをあげて昼食をとり、三時に“nona”の祈りをあげて昼寝をし、夕方におやつを食べ、七時に“vispera”の祈りを合唱し、夕食後休息し、“completas”の祈りをあげて床に就くのだが、そのほか日によっては告解や特別な勤行が付け加えられることもあった。以上が毎日の日課だが、単調な生活に退屈きっていた尼僧たちの中には、暇を見つけては噂話に興じたり、陰口を叩き合っているものもいたが、副王の寵愛を受け、有名貴顕の士が僧室に訪れてくる sor Juana がその標的にされたことは言うまでもない。しかし彼女は持ち前の知恵と才覚、思慮深い言動でたくみに誹謗の矢をかわした。おしゃべり好きの尼僧たちは当然のように彼女の部屋にも押しかけてきたが、読書と詩作に打ち込みたいと考えていた彼女もこれには悩まされたようである。

San Jerónimo 修道院の尼僧たちは女中、あるいは奴隷を使ってもよいことになっていたが、sor Juana もやはり四歳年下の女奴隷を使っており、十年間同じ僧室で暮らしたあと、妹の Josefa に売り渡したとのことである。⁽²²⁾記録には残っていないが、彼女はおそらくその後も女中を使っていたと考え

(22) O. Paz, op. cit. p. 179.

られる。

Sor Juana が修道女になって四年たった一六七三年、それまで彼女が庇護を受けてきた Mancera 侯爵夫妻が副王の職を退くことになった。一六七四年、fray Payo Enriquez de Rivera が副王殿につくが、さいわい彼女はこの新しい副王の庇護を受けることができた。その後、一六八〇年、Laguna 侯爵 Tomás Antonio de la Cerda が副王の職につくが、一六八八年までつづいたこの Laguna 侯爵の副王時代が彼女にとってもっとも仕合わせで実り多い時期だった。

天成の詩人であり、驚くべき読書家にして博識家の sor Juana が本をどれくらい持っていたかは気になるところだが、O. Paz は何人かの研究者の説を紹介したあと、その作品の内容から推定できる作家や作品を考慮に入れて、少なく見積っても千五百冊は下らなかつただろうとのべている。⁽²³⁾ Paz はそのあと彼女が読んだと思われる作家、作品を取り上げ説明を加えているが、十六、七世紀のスペインの作家をはじめ、ラテン文学やスコラ哲学、新プラトン主義、ヘルメス文書をへてアタナシウス・キルヒャーにいたる名表は、博識家 Paz の簡潔明快な説明の力もあずかって、眩くような知の体系をあらわしており、ただただ嘆息するほかはない。ただ、宗主国スペインが反宗教改革によって近代への門を閉ざしたうえに、地理的な条件も加わって、彼女の生きていた世界は外界に対して、時代の流れに対してまったく閉じられていた。あれだけの書籍をもちながら、その書齋にはマキアヴェリやホッブス、ボーダン、あるいはモンテーニュ、ベーコン、デカルトなどの本が一冊も並んでいなかった。Paz はこうした事情について次のようにのべている。

El mundo de sor Juana fue medio mundo. Encerrada en el español y el latín, cuando este último dejaba de ser una lengua universal, ignoró la literatura francesa y la inglesa que, precisamente, en esos siglos habían producido una serie de obras únicas, de Ronsard a

(23) O. Paz, op. cit. p. 321.

Racine y de Shakespeare a Milton. Más grave aún, si cabe, fue no tener noticias del movimiento filosófico y científico de su tiempo. Cuando las tuvo, como se ha visto, fueron vagas, deformadas por la camisa de fuerza de la ortodoxia o desfiguradas por las fantasías de espíritus como Kircher. Entre los hombres y mujeres nacidos en este continente, uno de los más lúcidos, Juana Inés de la Cruz, tuvo que vivir entre ideas y libros envejecidos. La escolástica desaparecía en el horizonte y el neoplatonismo era una novedad vieja de dos siglos: la primera era una momia y la otra una reliquia. (...) Su texto más comentado, causante de un gran escándalo intelectual en México, España y Portugal, la *Carta atenagórica*, es un ejercicio a un tiempo sutil y vano. Hoy es ilegible. Esas páginas fueron escritas en 1690 y ya entonces eran anticuadas: en esos años escribían Leibniz, Newton, Spinoza y tantos otros. El caso de sor Juana se ha repetido una vez y otra vez: ha sido una nota constante de la cultura española e hispanoamericana hasta nuestros días. De siglo en siglo un Feijoo, un Sarmiento o un Ortega y Gasset intentan ponernos al día. Vano empeño: la generación siguiente, embobada con esta o aquella ideología, vuelve a perder el tren. Sufrimos aún los efectos del Concilio de Trento.

(ソル・ファナの世界は半世界であった。スペイン語と、もはや普遍性を失っていたラテン語の中に閉じこめられていた彼女は、フランス文学もイギリス文学も知らなかったが、これらの世紀においては、ロンサールからラシーヌ、シェイクスピアからミルトンにいたる一連の稀有な作品が生まれ出されていたのである。同時代の哲学と科学の動向についても知識が得られなかったが、これはさらに深刻な問題であった。たとえそうした知識を得られたとしても、すでにのべたように、その知識は正統的信仰という狭窄衣によって

変形させられているか、キルヒャーのような精神の生み出す幻想によってゆがめられており、曖昧模糊としたものになっていた。つまり、この大陸で生まれた男女の中でもっとも聡明な人間のひとりに数えられる Juana Inés de la Cruz は古びた思想と書物に囲まれて生きざるを得なかったのだ。スコラ哲学はすでに地平線の彼方に姿を消しており、新プラトン主義は二世紀前の流行でしかなかった。つまり、前者はミイラであり、後者は遺物でしかなかった。(……) “Carta atenagórica” はメキシコ、スペイン、およびポルトガルで大きな論議をまき起こした。これは彼女のテキストの中でももっともよく取り上げられたものだが、現在では繊細ではあるものの意味のないものになっている。つまり、今日ではもはや読むに耐えないのである。この文書が書かれたのは一六九〇年のことだが、この頃にはすでにライプニッツやニュートン、スピノーザなど多くの人びとがものを書きはじめており、彼女の文書は時代遅れになっていた。Sor Juana の例はけっして最初で最後だと言うわけではない。彼女のようなケースは現在にいたるまで、スペインおよびイスマノアメリカ文化の常数としてなん度となくくり返されてきた。Feijoo, Sarmiento, Ortega y Gasst のような人たちが何世紀にもわたって、われわれを時代遅れの人間にするまいとして努めてきた。しかし、それも空しい努力だった。次の世代の人たちは、あれこれの思想にまどわされてつねに時代の波に乗り遅れてしまうのだ。われわれはいまだにトレントの宗教会議の結果に苦しめられているのである。

Jean Franco は sor Juana と同時代人の Carlos Sigüenza y Góngora を評して、“...had he been born in Europe, [he] might have been a Newton or a Leibnitz”⁽²⁴⁾ (彼がもしヨーロッパに生まれていたら、ニュートンかライプニッツのような人物になっていただろう。) とのべている。いささか大袈裟な讃辞で驚かされるが、J. Franco もやはり新大陸の文学者や科

(24) Jean Franco; *An Introduction to Spanish-American Literature*, p. 21; Cambridge Univ. Press, 1969.

学者の置かれていた閉鎖的な状況を強調したくて、このような誇張した表現を用いたにちがいない。いずれにしても、当時の文学者たちはきわめて不利な条件下に置かれていたのであり、その事情は現在においてもさほど大きく変わってはいない。イスパノアメリカの現代作家 José Donoso の『ラテンアメリカ文学のブーム』の中で語られているチリのきわめて閉鎖的な文壇の状況を知れば、先の Paz の言葉もなるほどと納得されるはずである。しかし、こうした不利な状況はつねにマイナスに働くわけではない。Paz も指摘しているが、時代の波に乗り遅れること、つまり後進性が逆に若々しい活力の源泉となることは、⁽²⁶⁾イスパノアメリカの現代文学がもっとも有弁に物語っているところである。Sor Juana もやはり他のヨーロッパの近代文学に接することはできなかったが、“Primer sueño”をはじめバロック文学の至宝とも言うべき作品を数多く残している。その意味では、陳腐な言い草だが、歴史はくり返されると言えるだろう。

ここでもう一度、sor Juana の伝記にもどることにしよう。Sor Juana は Marcera 侯爵、fray Payo Enríquez de Rivera、Laguna 侯爵が副王をつとめた時代は、その時々副王の庇護を受けて、自由に創作や読書、思索に打ちこむことができた。しかし、一六八八年、Laguna 侯爵が副王職を退くとともに、彼女の運命に暗雲が漂いはじめる。Laguna 侯爵が一六九〇年までメキシコに滞在したので、それまではさほど問題はなかった。しかし、Laguna 侯爵がスペインに帰国した年に、彼女はポルトガル人の Vieyra 神父の説教を批判する“Carta atenagórica”を発表する。この文書がもつて San Jerónimo 会と Jesús 会の宗教抗争に巻きこまれ、彼女は苦境に立たされることになる。加えて、一六九二年にスペインから彼女のことを気遣っていた Laguna 侯爵が急逝したために、最後に残された庇護者まで失い、いよいよ孤立感を深めた。また、一六九一年に大水害があり、それがもつて

(25) ホセ・ドノソ『ラテンアメリカ文学のブーム』内田実訳、東海大出版会、1983年。

(26) O. Paz, op. cit. p. 410.

食糧が不足しはじめた。行政側の対応のまずさもあって、翌年、ついに暴動騒ぎが起こり、市内は混乱した。庇護者を失ったうえに、社会不安を目のあたりにした sor Juana はすっかり動揺し、ついに狂信的なところのあるイエズス会士 Antonio Núñez de Miranda を告解師に選んだ。Núñez de Miranda とさらに高位の聖職者の強い勧めで、彼女は霊的な生活に入るために筆を折る決意を固め、さらにかつてなかったことに苦行まで行なうようになった。一六九四年、彼女はイエズス会士の勧めもあって、貧しい人たちのために役立てて下さいと言って、大切にしていた蔵書や楽器を大司教の Aguiar y Seijas に差し出す。大司教は彼女の私有物だけでなく、彼女が会計係をしていた San Jerónimo 修道院の金まで差し出すように命じた。Sor Juana はイエズス会士たちの勧めに従って、創作と読書を断念し、霊的生活に没頭することになる。Paz によると、それでも彼女は僅かばかりのお金と蔵書を隠しもっていたが、これはいずれ自由にものを書いたり、読むことができるようになれば、ふたたび文学の世界に戻ろうと考えていたからではないかと推測している。しかし、彼女の突然の死によって、その夢はついに実現しなかった。一六九五年、San Jerónimo 修道院に疫病が流行し、修道尼たちが次々に亡くなってゆくが、その看病をしている時に、sor Juana も感染し、四月十七日、四十六歳でその生涯を閉じた。

(未了)

(27) Hector. A. Murena; El pecado original de América, p. 21~51, Edit. Sudamericana, Argentina, 1965.